



## 参議院選挙結果と 9 条改憲をさせないために

第 26 回参議院選挙の選挙区の投票率は 52.05% (比例区は 52.04% だった (十代の投票率は 34.49%))。半分と少しの有権者の投票率の結果、自民党は単独で改選議席過半数を獲得 (改選 55 議席から 63 議席へ)、連立政権与党は、自民・公明とあわせて参議院で過半数を大きく上回る 146 議席を確保した。その結果、参議院でも改憲容認ないし推進の立場を示す日本維新の会と国民民主党の両野党など、いわゆる「改憲 4 党」の総議席数が改憲発議に必要な議席定数の 3 分の 2 を大きく上回る事となった (177 議席)。これで衆参両院とも改憲発議に必要な 3 分の 2 の議席数を満たす事となった。言い換えれば、違憲の選挙区制度のもとで、半分強の投票率によって憲法尊重義務 (99 条) を守らない国会議員が国会の 3 分の 2 を占めたということである。

さて、選挙戦終盤の 7 月 8 日に安倍元首相が銃撃され死亡する事件が起き、これが選挙にどう影響したかは不明だが、それ以上に安倍を筆頭に自民党や改憲推進の政党関係者 (議員) が、靈感商法などで社会問題を起こし続けている旧称「統一教会」 (現在「世界平和統一家庭連合」) と 1960 年代以降深い利害関係が続いていることが浮き彫りになった。実はこの件も触れたいところだが、字数の関係もあり、ここでは選挙結果を受けて、今後起こる改憲議論の問題に絞って述べたいと思う。現政権の本気度は不明だが、安倍元首相の「遺志」を継ぐことを強調し、憲法「改正」に取り組むことを表明している以上、国会において改憲議

論が何らかのかたちで動く可能性は高い。ただし、改憲を主張する政党間で具体的項目について主張が異なることも確かで、直ちに改憲案全体がまとまるようにも思えないが、しかし憲法 9 条改憲の大枠については政党間での調整が進む確率が高いのも事実である。なぜならこの国の権力者たちは戦後一貫して 9 条を改憲して「普通の国」 = 「軍隊を持って軍事的プレゼンスを行使できる国」にしたいと考え行動しており、9 条改憲は最初から改憲の最優先課題だからである。戦争によって誰が被害を受け、誰が利益を得て、その結末はどんなものだったのか、1945 年の敗戦から今日まで、この国は戦前日本と戦争についてまっとうな総括をしてこなかった。戦争犯罪の追及や戦後補償問題を正面から取り組まない、平和主義の徹底と憲法前文にある国際的にも平和の希求を主体的に取り組んでこなかった。

しかし、少なくない市民が戦争をした国だったという反省から日本国憲法の核心を理解し、9 条改憲を実現させなかったことも事実だ。そのせめぎ合いはこれからも続けなければならないだろう。本当であれば、早く改憲を阻止し、この憲法の下、世界の市民と連帯して国際的な平和を実現するためにこの国を貢献させなければならないのだが。

冒頭触れたように国会での憲法「改正」発議に賛成する国会議員数は 3 分の 2 以上となったが、憲法 96 条は「この憲法の改正は、各議院の総議員の 3 分の 2 以上の賛成で、国会が、これを発議

し、国民に提案してその承認を経なければならない。」と規定しており、仮に両院総数の各3分の2が賛成しても、国民に発議するに過ぎない。

最後は国民が決めるのだ。ロシアのウクライナ侵略戦争を直ちにやめるべきだと思う人は多い。その思いは9条と通底している。50%強の投票率

で決まった国会議員や政府に全権委任をせず、有権者の過半数以上の意思で改憲ではなく、憲法を実践できる社会にする。その権利は国民にしかない。

(H.K)

## ウクライナの戦争について思うこと

ロシア・ウクライナの戦争について短くまとめると雑な論理になってしまいますが、限定的な論点一覧のようなものとして、議論の1つのきっかけとなれば幸いです。

### ◆ 戦争の3つの側面

報道で目にするのは、ロシアとウクライナ両国間の戦争です（露ウ戦争）。国境は両国系の住民が住んでいる帯として捉えるのがロシアの見方といえます。しかし、線である国境は武力で変更するのではなく、住民の意思を踏まえた国家間の合意及び他国の干渉排除という民主主義と自立の原則に則った国際法秩序を確実に形成し、「人間の安全保障」の観念を確固たるものにするのが求められていると思います。

冷戦が終了して軍事同盟は不要になるはずでした。しかし、パックスアングロサクソニカという現実の政治は、軍事力による支配の拡大を止めることなく、NATOの東方拡大を企図し、ロシアもこれを阻止すべく軍事力で対抗しました。この戦争は米口の代理戦争でもあると思います。2014年のウクライナのマイダン革命とそれ以降のアメリカの介入は、ほとんど報じられていませんがさまざまいものがあります。

露ウ戦争の3つ目の性格は人類を横の関係で見た上下の闘いの側面です。戦争を開始するのは「上」で、犠牲になるのは「下」です。ロシアでもウクライナでも抑圧されながらも「下」による反戦活動がありますが、特にウクライナのそれは

全く報道されていません。世界の反戦・非戦の行動の連帯によって人類の愚かな「戦争文化」を変えたいものです。

### ◆ 戦争にどう向き合うか

9条の考え方は戦争を予防することこそが最も重要だというものですが、外国軍が侵攻してきてしまった場合、非武装で抵抗するか武器を取って戦うかという深刻な問題があります。今ウクライナでは、従来の非武装抵抗派は、それを貫くシュリアジェンコらと軽武装容認のイリヤらに分裂しましたが相互補完の関係にあります。これを見た日本でも議論が再燃しています。観念論でなく、具体的な戦闘場面に応じたシビアな議論が必要だと思います。

安全保障とは、個々の人間の安全保障であるというのが議論の到達点です。そうだとすれば、露ウ戦争は少しでも早く和平・停戦すべきです。そのためには、停戦を求める世界的な連帯行動が決定的に足りません。

民主主義の時代には、戦争における情報戦の要素が増します。日本のメディアは欧米に比べても情報の規制と歪曲が目立ち、主権者国民は情報奴隷のような存在です。

ロシアが仮に民主主義の国家であったなら、この戦争は起きなかったと評されています。そのロシアは欧米の民主主義をカッコつきのものとして揶揄しています。ウクライナにおける野党の活動禁止、和平・停戦を求める人々の弾圧の報道も皆

無ではないでしょうか。ヨーロッパでは「ポストデモクラシー」が大きな問題になって久しくなりました。まして日本では民主主義の形骸化が著しいようです。日本が戦争の当事者にならないため

にも、真実を知り活発に議論することが必須だと思います。

(蓼沼)

## 「慰霊の日」のオキナワ

6月23日は、沖縄戦「慰霊の日」である。この日、1945年6月23日<sup>1)</sup>は日本帝国陸軍牛島満中將が自決し、日本軍の戦いがなくなった日とされる。しかし、牛島は最期の訓令で「最後まで取闘せよ」と遺したことから、その後も戦いは散発的に続き犠牲者も出し続けた。あくまで、「日本軍として」の組織的戦闘が無くなった日として、沖縄ではこの日を、沖縄戦で亡くなった全戦没者を追悼する日と定め、日本復帰前から休日としている。

僕は、かねてから、この慰霊の日に訪沖をしてみたい、と思っていた。コロナ禍前の例年なら、沖縄県庁前から最後の激戦地であり「平和の礎」がある摩文仁まで臨時シャトルバスが運行されていたのであるが、コロナ禍が治まらなかった今年も、密集を避けるため運行が中止された。遺族ですら時期をずらしてお参りをしている状況なので、摩文仁はあきらめて、沖縄戦の初期の激戦地を訪ねることにした。

沖縄県庁前からモノレールの“ゆいレール”に7分ぐらい乗ると、激戦地となった安里52高地(シュガーローフ)がある那覇市の新都心おもろまちに到着する。敗戦直後に米軍の住宅地区として接収され、その後日本へ返還されて、90年代後半から開発された街である。街は整然とした道路が施設され、複数の大きなショッピングセンターや公園、高層マンション、県立博物館などが建ち並ぶ。その一角の給水タンクのところにシュガーローフの戦いの慰霊塔はある。分かりにくい所に設置されているのもあって、普段は人があまりいないのであるが、慰霊の日の朝は、地味な色のかりゆしを着たおそらく近所の人、休日出勤前のサ



シュガーローフの戦いの説明板と慰霊塔

ラリーマン風の人、間を置かずにお参りの人がやってきていた。夕方の地元ニュースで知ったのであるが、供えられた花には、沖縄在住のウクライナ人有志からのものもあったらしい。

さらに、新都心おもろまちから“ゆいレール”に15分ぐらい乗ると、前田高地(ハクソー・リッジ)の最寄駅に着く。前田高地は、もともと浦添城があった場所で、琉球王国が成立する前の三山時代の一時期、中山王国の中心地だった事もある。その後、沖縄戦では激戦地となり、映画『ハクソー・リッジ』の舞台にもなった。駅からの急坂を登った丘からは、米軍が最初に上陸した渡具知周辺・普天間基地・嘉数の丘、逆を向けば、首里城・新都心おもろまちと、沖縄戦の初期の重要地点を臨むことができる。僕が前田高地へ登った時は、小学生たちがボランティアの人に引率されて、平和学習をしていた。祖母、母、子供の3代で散歩をしている家族の姿もあった。正午が近づくと、数々の慰霊碑に一つひとつ花を供える老夫婦もあらわ



前田高地に数々ある慰霊碑のひとつ。  
慰霊碑一つひとつに花が供えられた

れ、老若男女問わず次々に丘の上へ人が登ってきた。そして、正午の合図に合わせて僕も黙祷をした。

6月23日は米軍の軍事訓練は行われない。普天間基地のそばに位置する前田高地は、いつ行ってもオスプレーや輸送機などが低空でひっきりなしに通過するのであるが、慰霊の日の前田高地は静かであった。帰り際、丘を下ったところにある浦添警察署を何気なく眺めてみると、半旗になっていることに気がついた。国籍<sup>2)</sup>や立場を超えて、みんなで平和を願い誓う、普段の旅行とは違うオキナワの姿をみた。



浦添警察署に掲げられた半旗

- 1) 6月23日の自決決行日には、諸説ある。牛島満中将の孫の牛島貞満氏の著書『第32軍司令部壕』（高文研、2021）の中では、牛島家では命日は22日、そして戸籍上の死亡日は20日になっているのだそうだ。慰霊の日は現行のままでいいとしつつ、圧倒的な数の証言が残されている司令官でさえ決行日が定かでない杜撰な国の調査内容で、一般の兵士なら、どのような扱いをされているのか、と憤りを記している。その上で、動員した国の責任は「『英霊』として祀り上げられて解決するものではない」と記している。
- 2) 沖縄戦に、韓半島や台湾や樺太の出身者も動員され、多くの犠牲者が出た事は、忘れてはいけない。

(GINZO)



前田高地からみた普天間基地方向の風景

## 「済州4・3」を知って考えたこと

映画「スープとイデオロギー」は、1948年、「済州4・3事件」の渦中にいた当時18歳の母の生涯について、娘（ヤン・ヨンヒ監督）が紡いだドキュメンタリーだ。恥ずかしながら、私はこの1948年に済州島で起こった虐殺事件について、何も知らなかった。済州島というと、韓国ドラマの舞台になったり、豊かな自然や海の幸が取り上げられる観光地、という認識しかなかった。

この映画を観たあとに、私の中には2つのことが残った。国政と戦争に翻弄される個人の人権を目の当たりにして感じる、深い悲しみ。そして、日本の戦争責任についてだ。

年老いた母が、娘にはじめて語る「済州4・3事件」の悲劇。朝鮮総連の熱心な活動家だった両親は「帰国事業」で3人の兄たちを北朝鮮に送った。父が他界した後も息子たちに借金をしてまで仕送りする母を責める気持ち。娘は母が体験した虐殺事件を知る中で、なぜ両親が頑なに「北」を信じるのかを理解し始める。

一方で、壮絶な体験の記憶を掘り起こしていく母は、アルツハイマー病を患い、ここに居ないはずの夫や息子と呼ぶようになる。2018年4月3日、済州島の4・3平和公園で行われた70周年追悼式典に、母を連れて行った娘の想いが非常に重く、深い悲しみが伝わってくる。

「済州4・3事件」とは、1948年4月3日、済州島での武装蜂起に始まり、その武力鎮圧により3万人近くの島民が惨殺された事件だ。第二次世界大戦後、ソ連との対話に見切りをつけたアメリカは、朝鮮半島の戦後処理を、国連監視下での選挙による新国家樹立として計画したが、ソ連がこれを拒んだ。

これにより朝鮮半島の南部のみの単独選挙を行うこととなり、単独選挙による南北分断に反対した左派島民が武装蜂起を起こしたのだった。300

人あまりの規模で起こした武装蜂起に対し、南朝鮮当局は政府の鎮圧軍、警察および反共団体による大弾圧を行った。朝鮮戦争（1950～53年）の時期までに130余りの村が焼かれ、1954年9月までに

3万人近い島民が犠牲となった。犠牲者の大半は、「イデオロギー」とは無縁の島民たちだった。

第二次世界大戦において、朝鮮半島を植民地として支配していた日本は、敗戦により東アジアにおける戦争責任を負うべき立場だった。それにもかかわらず、戦後処理をめぐる当時のアメリカとソ連の思惑が重なり、朝鮮半島と朝鮮民族の解放と独立は歪められ、日本が負うべき負債は、朝鮮半島と朝鮮民族に転嫁される形となった。この映画を観て、日本の戦後責任について、改めてその重さを痛感した。

「タイトルには、思想や価値観が違っても一緒にご飯を食べよう、殺し合わず共に生きようという思いを込めた。」とヤン・ヨンヒ監督は伝える。オモニ直伝の「黄金色の鶏スープ」をヨンヒ監督の夫・カオルさんが一緒につくるシーンでは、ヨンヒ監督は二人に話しかけながら撮影する。映画には、あたたかい家族の愛も溢れている。

次回の渡航先と、その目的が決まった。済州4・3平和公園を訪れ、韓国が負の歴史をきちんと残すことで、平和と人権の教育を実現していることを直接見たいと思う。そして今後HuRPとして平和のために、新たにどんな活動ができるかを考える機会としたい。

(MO)

『スープとイデオロギー』公式サイト

<https://soupandideology.jp/#pagetotop>



## 「みなさん、人助けしてますか？」

少し前のこと、ある日新聞を開くとこんな記事が目飛び込んできた。「世界人助け指数で日本は最下位」。

質問事項は3つ。この1か月で、①人助けをしましたか？ ②ボランティアをしましたか？ ③寄付をしましたか？ その答えが右記の結果。対象は114の国・地域なので日本は最下位。しかもぶっちぎりで。この調査はイギリスにおいて行われたものだから、海外の人の目には「日本人って冷たい」と映っているかもしれない。

それに対しては、こんな考えもある。困った人に手を差し伸べることは当たり前のことだから、特別に「人を助けています」という意識はない。このような人ははたから見れば人助けをしているんだなあ、きっと。

あるいは意識して、積極的に人助けをしても、恥ずかしいので「人助けをしています」とは言わない。これはこれでかっこいい。

やさしさって何だろう？ ひと昔前は、分かりきったようなことにいちいちつまずき、「やさしい」という言葉も広辞苑で引いていた。現在の第7版では「優しい」とのみある（「易しい」は別立て）が、当時（第4版）は「優しい」とともに「恥しい」という漢字が同じ意味に用いられていて余計に戸惑った。意味のひとつに「さし向かうと恥じらうほど優美である」とあった。「優」と「恥」とは合わせ鏡のように表裏一体となっているのか。そうすると、恥ずかしいということでは、優越感を抱くことも劣等感を感ずることもどちらも同じだな、などというようにことを脱線しながら考えた。また、「や

さしい」の意味に「周囲や相手に気をつけて控え目である。つつましい。」ともある。日本人に対して言われることがあるのはこのあたりだなと思った。

では現在の日本において、黙って人助けをしている者が果たして多数を占めて

いるかということ、どうも心もとない。少なからず新型コロナウイルスの影響もあるだろうが、人助け指数が低い要因のひとつに格差社会も挙げられていた。相対的に貧困化しつつある今の日本で、他人のこともおもんばかる余裕などない、と。コロナ禍の下、目指す社会像として一国の首相が「自助、共助、公助」とのたまったのも記憶に新しい。

確かに政治、経済、教育、報道の自由、ジェンダー……さまざまな局面で、日本のほころびが目立ち始めている。にもかかわらず、いまだに先進国気取りの言論には気恥ずかしさを感じる。

だから、「私は人助けをしています」と声高に発するよりも、まずは目配り、気配り、思いやり……。身近でできることからはじめよう。かくいう私は、いつも周りのみなさんに助けられっぱなし。「心に借金」を背負わぬよう、少しでも恩返しできるよう努めている。

(手島祥午)

	全体	手助け	寄付	ボランティア
1位 インドネシア	69%	65%	83%	60%
2位 ケニア	58	76	49	49
3位 ナイジェリア	52	82	33	42
4位 ミャンマー	51	51	71	31
5位 オーストラリア	49	57	61	30
...				
110位 韓国	22	29	28	10
111位 イタリア	22	33	23	9
112位 ベルギー	21	25	23	15
113位 ポルトガル	20	37	13	10
114位 日本	12	12	12	12

英国の慈善機関「チャリティーズ・エイド財団」の調査から

2022年6月27日朝日新聞  
(朝刊)より

HuRPでは、今後は、「HuRP 通信オンライン」として、ウェブサイトより発信していきたいと考えています（半期に一度など、紙媒体での発信も検討中です）。  
ぜひご期待下さい！